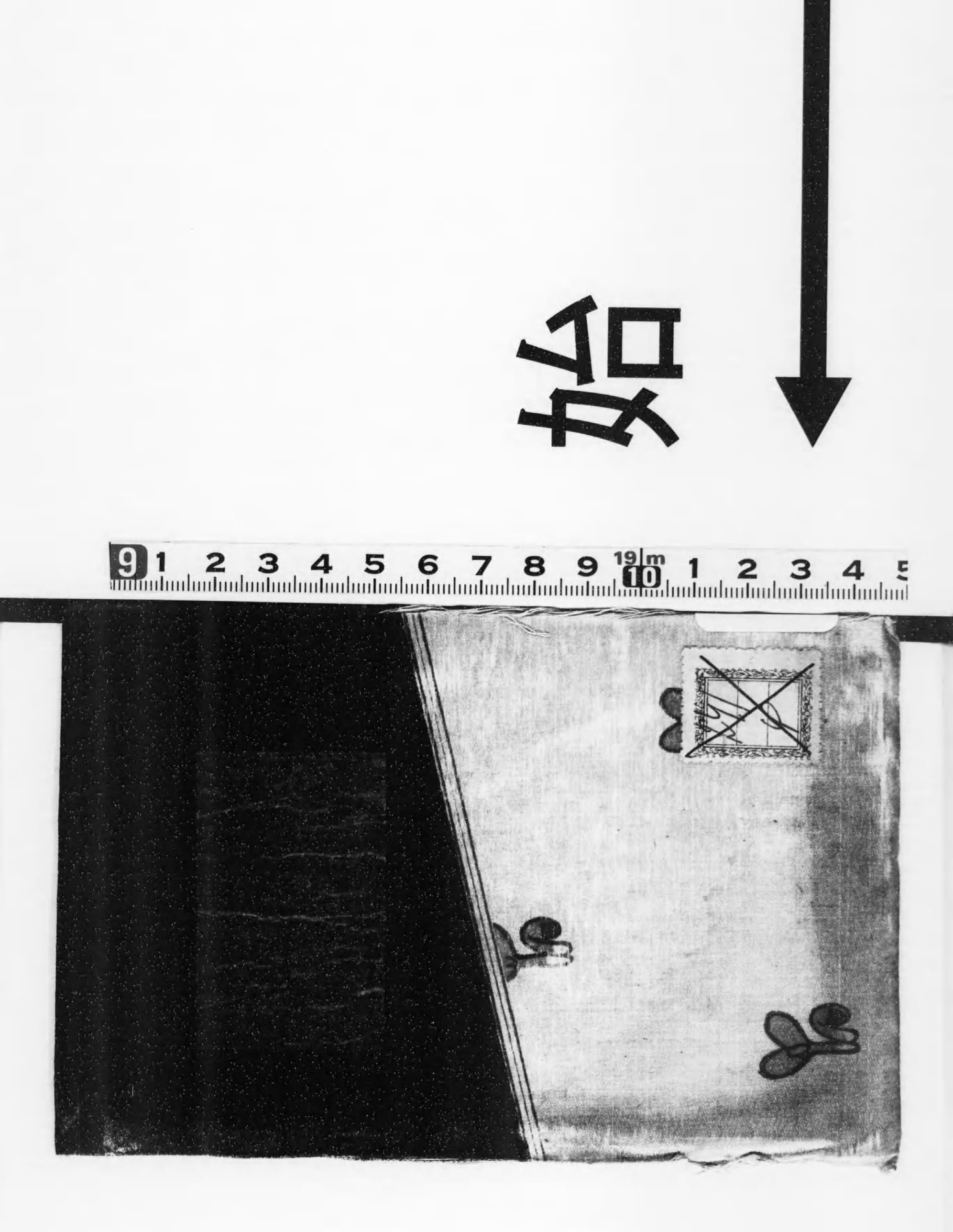

特110
174

曙の生人

松尾初子

著者

大正
11.9.11
寄贈

序

此の詩集の著者松見初子女史は容貌佳麗、其の性質は無邪氣快活、聲音は清朗にして聽者に快感を與ふるの人、恐らく著者と面接したる人は誰も女史を憎み得ないであらう、其の詩また其の人の如く、他を恨まず憂鬱の色無く、たとへば峯の櫻の暖き微風に戰ぎつゝ旭光に輝く如きか、或は又梨の花の月光に匂へる如きか、否、此の佳人の詩の、それらの花に比して更に興味豐なるは人間の氣分感情のそこに、やさしく美しく、いきづくからである。その人生の闇黑面を覗き、蛾眉をひそめて曙光に衆の目

ざめむことを希望し、戀の甘美を不合理の習慣の妨ぐるをいとひ、固陋の周圍が女人を壓するの力の不自然なるを苦笑する所なぞ、必ずや同性の胸に、やさしき反響を呼ぶであらう。世の人『壺のいしぶみ』と云へる詩歌集の著者津田出氏の血を引いた女史のこの處女詩集の優雅と正直とを味ひたまはむことを希望す。

一九二二年七月

正富汪洋

初秋の風が、こゝろよく肌を吹く頃ほひ、私の小詩集「人生の曙」が世に出るでせう。この小詩集は詩歌に未熟な私が時折、諸種の事象にそゝられた悲喜其の他の感じを、只單純な言葉を以て、書き連ねたに過ぎないのです。したがつて、何の强味も輝きも、そこには見出されないかも知れませんけれど、私としては、再び味はふ事の出來ない瞬間のかたみとして拾ひ集めたもの、懷かしいものです。もし皆様方がいさゝかでもお心に觸れる何物かをこの詩集に御認め下さつたなら、私はほんとに幸だと

思ひます。

終りに臨んで此の曙の光の中にやつと目ざめたばかりのさゝやかな私の行く手の光りともなり、且又先達となつて下された、正富先生の御教示に對し、又その尊い時間をさいて序文をお書き下さつた事に就いて深く先生に感謝します。

大正十一年夏

初子

目次

うす靄の中に……一
夜……五
一筋の君の黒髪……六
小さき小鳥すら……七
うれしい手紙……一〇
湯の感觸……一二
若葉の薄甘い匂ひ……一四
青春……一六
なつかしい現象……一九

春は生きて居る……三一
空行く小鳥よ……二六
わびしきまゝに……二八
生の輝き……三三
敗殘者の死……三六
夜の喜び……四一
哀　愁……四四
微小な響……四七
夏のまひる……五〇
聽けその響……五二

吹く風も……五四
孤　獨……五六
散る花……六一
指　環……六三
紅薔薇……六五
自然の風光……六七
睡　蓮……六九
夕　顔……七一
光……七三
五月雨降る日……七五

更衣……七七
紅絹のさゝやき……七九
流れ星……八一
罌粟……八三
林檎……八四
人生の曙……八五
眠れる子……八七
木もれ日……八八
湯上り……八九
櫻ちる夕……九一

友の歸つた時……九三
春の入日……九六
花見ごろも……九八
白い牛……一〇〇
風荒む夜……一〇三
紅椿……一〇四
小筥……一〇六
清きねむり……一〇九
勞働者よ……一一五
冬の夜の電車停留場にて……一二〇

籠の鸚鵡……一二五
黎明……一二九
かもめどり……一三一
小猿……一三四
樂しきまとゐ……一三七
過去の思ひ出……一四〇
喜びのかげに……一四八
目ざめよわが魂……一五一
或る女に……一五五
めざめた惱み……一六三

別離のかなしみ……一七一
電車の中の感激……一七九
短歌……一八八

うす靄の中に

うすもやの中に、
不安と恐怖とに、
をのゝきながら、
戀人に會ふために、
今日も出で行く私の行くてに、
一つ星の輝き、
おゝそれは！　それは！
あなたの瞳のかゞやき。

そつと訪づれてくる、
夕ぐれの風は、
あなたのやさしい肉體に、
ふれた瞬間のうれしさ。

おゝ私の敏感な靈と肉とは、
此薄靄の中に、
戀人のおもかげを、
幻影のやうに描いて、

羞耻と歡喜とに躍る、
おゝ肉よ！　靈よ、
何故のをのゝきぞ、
相みる時の嬉しさを思ひてか、
はた孤獨のわびしさにか。

思ひ果てなき、
私の行くてに、
おゝかゞやくよ、
一つ星、

うすもやの中に。

夜

風はすさみ、
雲はとぶ闇夜に、
うるめるまなこのごとく、
淋しげに輝く星よ、
蒼穹の月よ、
何をか語る、
汚れを包む夜の世界の中に

一筋の君の黒髪

おゝ一筋の黒かみよ、
私の目覺めた白いベッドに、
私がねむる夢の中に、
ぬけ落ちた君の黒かみ、
おゝ淋し一筋の黒かみ、
枕の緋房にまつはる、
君の黒髪。

小さき小鳥すら

女！女！おゝ女！
私は此の聲をきく時、
たへられぬ淋しさに、
泪ぐましさに、
私の肉體は戰慄する。

女といふ名に、
此の世に生を得たばかりに、

才、智の兩翼は、
常に因襲の壓迫に虐げられながら、
常に自由と解放にあこがれる。

あはれ女性、
小さき小鳥すら天空に其の翼を、
のばし自由に歡喜してゐるではないか。

お丶私も女だ、
既成の不合理な制約からのがれて、

久遠に自由の奔流に、
せかれることなく、
沮まれることなく、
其の豊富な生命に生んことを、
渇望してやまない、
あ丶呪しき因襲よ。

うれしい手紙

をどれよ、
私の心、
嬉しい此の手紙の上に、
ひとりねざめの追懐に、
感じ泪ぐむ私の心、
おゝ肉體は、
今し、
和やかな光にみち、

私のひとみはすべての上に、
ほゝゑみを投げかける、
おゝ跳れ我が心、
此の手紙の上に。

湯の感觸

みなぎる湯烟に、
やはらかな光りの、
とけこんだ湯槽に、
私は半、現、半、夢心地に、
自分の體を浸して居る。

私の身體の動搖につれて、
忍びよる暖き湯の感觸、

おゝ私の飾らぬ肉體の輝き、
こぼるゝ黑髮は私の肩に、
操り返すむねの皷動は、
私の五體を躍らせて居る。

室を埋むる湯のもやは、
電燈の光りを、
半透明にぼかして、
靜かさが室一面を、
細やかにゆれて——

若葉の薄甘い匂ひ

太陽が一日の慰安と休息とを、
地上のすべてにもたらした時、
東天に輝く美しい月の光が、
此の靜かな空氣の中に充滿された、
室外には青葉の薄甘い匂ひが、
夜の大地にひろがつて、
和かい毛布にくるまつた氣分が、
私をとりまいて行く。

のび〳〵と伸した私の肉體に、
靜かさが忍び足で近よつてくる、
今し自然の靜かさが、
美しさの限りを表して、
蒼白の中に流れて行く。

青春

おゝ青春の若さにをどる、
美しき戀の妖女よ、
お前はいつも無遠慮に、
自然のまゝの黑かみや、
白蠟のやうな膚もあらはに、
私の固く閉された此のむねに、
開けよと忍びよる。

おゝ其の時私はそれが、
誘惑と知つても、
お前の甘いさゝやきに醉はされて、
身體を廻る血潮の流れも、
朝つゆのきらめく、
花の一片にさへ、
祝福されるやうに、
思はれてならない。

人世の憂慮も悲痛も忘れて、

私の魂の不斷の泪で、
汚れ世を淨化し、
靈の欲求にとけこんで、
戀の陶醉に、
地上を樂園に化してしまふ、
おゝ天使の如く、
清らけき戀の妖女よ、
我情熱よ。

なつかしい現象

おゝ輝くよ、朝の光、
五彩の雲は、
果てしなき御空に輝いてゐる、
みよ、
私が素足でしつかりと、
踏みつけてゐる黑い土を。
草や木の芽は、

まるで燃えるやうだ、
大地は日光を吸つて、
歡喜にをどつて居るではないか、
小鳥は梢に樂しさうな、
うたをうたつて居る、
數々の花は惜しけもなく、
其の豐麗な香をふりまいてゐる。

お丶大氣は、
其のはて知らぬ腕の中に、

私をしつかりと抱いてくれる、
私の玉のやうな肩に、
こぼれた黑かみはふるへて居る。

其の暖かい抱擁に、
お丶私の心は躍る、
あらゆる現象のなつかしさに、
あ丶時は流れる、
平和に、
萬物を調和しながら。

春は生きて居る

春光は流れて行く、
ゆるやかに、
物皆うれしさうに躍つてゐる、
おゝをどつて居る。

希望と愛撫の兩翼に包まれながら、
罌粟(けし)よりも小さい生の果てまでが、
日光を吸つてはちきれさうに、

おゝ世界は春だ、春だ、
凡てお前が投げかけて行く、
活氣とさうして自由とを、
寂寥より放たれた、
地上の生命の上に。
私は處女の樣な憧憬の目で
お前のやさしさと、
掬みつくせない豐潤さとを、
讃美して居る私は——

おゝ私達の生活が、
どんなに因襲的であつても、
私達の自由の焔はもえさかつて、
あらゆる物の魂の中に、
其の輝を放つて居るではないか、
女性としての、
強い生存がどんなに、
勇しい姿で活躍してゐるか。

おゝ今だ！　今だ、

とく目ざめよ多くの人々、
單調と無意味の流れから、
春はいつまでも、
私達の心の中に、
生きてゐるであらう。

空行く小鳥よ

あわただしくも、
日は沈んで行く、
かなた西の空へと、
木の葉は散る、
黑い土の上に、
おゝ夕ぐれの靜寂さよ、
私の悲しさを盛る、
心の器は、

聖堂の灯の如く淋しさにをのゝく、
おゝ空行く小鳥よ、
憂悶(うれひ)になやむ私のむねに、
甘き日のうたを、
今一度　あはれ一度うたひてよ、
ふたつなき甘き夢路の、
消ゆるいまはに。

わびしきまゝに

おゝ私の胸はをのゝく、
あゝ若さの凋落ほど淋しいものはない。
私の袂に手紙を入れた人も、
私の輝く瞳に魅せられた人も、
今は一人として此の私の、
存在を認めないやうに、
行き過ぎてしまふ、
私がどんなにきれいに、

きかざつた時でも、
美しいとは決して、
言つて呉れはしない、
私をみかへつてくれる人は、
もう一人だつてなくなつて、
しまつたのであらうか、
おゝ呪はしき歳月よ、
おゝ私のからだを、
踏みにじつたばかりに、
私はかうして、

世間から見捨てられてしまつたのだ、
あゝこれとても、
決して無理だとは思はない。

けれど淋しい、
私の若い情熱は、
さめ果てゝしまつたのだもの、
なんの刺激もなしに、
私が今通りつゝある人生の道を、
あるき續けるばかりだ、

行きついてしまふ處まで、
おゝそこに何の享樂があらう、
只行くてに私をまつて居るものは、
老と死とだ。

おゝそれは　それは、
私が踏んで來た過去にくらべて、
あまりに殘酷で、
あまりに淋しすぎる、
あゝ歳月は、

人生の歡喜と悲痛とをのせて、
流れて行く止む事なくして、

生の輝き

水盤の水はゆれる、
和やかな春風にふれて、
太陽の麗光に、
半裸體の彼女の肩は、
湯ぶねの上に、
美しさとなやましさとで、
輝いてゐる。

しつとりとぬれた黑かみは、
みのりよき葡萄の房のそれのやうに、
白い手から充ちこぼれて、
其の末は美しき海の藻とゆらめく、
若い生をほこる、
豐麗な乳房が純な處女の、
清らかさをうたつてゐる、
接吻をしらぬ清艶な朱唇、
汚れに染まぬ無心の眼眸、
内に充滿する情熱の、

放散する甘き其の香、
すべて青春の上に投げた、
大自然の豐かな、
惠であらねばならない。

おゝあくまで優艶な、
彼の女の姿態よ、
青春の王國に輝け、
眞純な生命の限りなき、
美しさをもつて。

敗殘者の死

おゝ敗殘者の死、
なんといたましい響であらう、
かつては戀に悶へし、
其の淸雅な瞳も肉體も、
一度狂つた彼を、
生の喜びから見捨てゝしまつた。
かくて彼は狂暴な不平と、

斷續的に起つてくる、
果敢ない妄想とに、
幾日惱まされたであらう、
地上のすべてが、
快樂に陶醉する時、
彼の行手は常に嘲笑と侮辱の、
重い扉で閉されてゐたのではないか、
あゝなんたる、
彼が呪はしくも悲慘なさだめであらう。

荒い死の感觸に、
彼の肉體と活動してゐた、
すべてのものが、
彼と一緒に永久に亡びてしまつた、
運命に虐げられし兒よ、
永劫に眠る其ふしどこそ、
煩悶もなく、
嘲笑もなく、
不平もなく、
平和に、幸福に、

神の惠に浸る事が出來るのだ、
汝よ、
敬虔な心をもつて、
神に祈りを捧げよ、
惠あまねき天國の宮殿の中に、
汝の運命より許されし、
此の日の終りを弔ふやうに
かなしさを刻んで、
一段と灯がゆれる、
いたづらに暮色が感慨の泪の中に、

私をとりまいて、
恐びやかに流れて行く。

夜の喜び

おゝ夜だ、夜だ、
なんとやはらかい訪れであらう。
一日のめまぐらしさから
此の私を、
暖かい團欒の中に投げ入れてくれる夜、
思つたばかりでも私は嬉しい、
卓上のものはどんなに、

貧しくつても、
私達の上に輝く幸福さは、
談笑の中に充滿して、
決してつきる事はない。

おちつきかへつた安心さが、
悅樂と歡喜とのすがたで、
豐潤な暖い空氣の中に、
私の魂ををどらせる、
私の愛する人達は、

愛の抱擁に其身を委せながら、
今日の終りの靜かさと、
よろこばしさに、
清らかな瞳を、
無言の中に輝かせて居る。

月は括つたカーテンから、
其優艶な瞳を投げて、
無心にうたふ吾子(あこ)たちの上に、
平和のゑがほをみせてて行く。

哀愁

木の葉戰がず、
鳥もとばず、
音もなく匍ひだす、
淡墨の夕ぐれ、
刻々と私の環境をとりまく。

小さき虫の音すら、
なくさめがたき悲痛になき、

憂悶はたえまなく、
わきかへり、
あく事なくふるへをのゝく私の心。

夜もすがら、
かなしみに悶へて私の身體、
休めんとする椅子、
それだに憂愁のカバーの、
かゝれるを、
あゝ開くによしなき、

哀愁のとびら。

微小な響

夏の日ざしは、
みどりの庭一面に、
燃へたつてまさに爛熟せる、
萬物の上に、
夏の世界の偉大さを示してゐる。
自然の力にはぐくまれた、
紅いろの花は、
環境を艶にぼかしながら、

蒼天の下に、
愛の果てしなき囁きを、
ひそやかに響かせて居る、
おゝ其のやさしき花びらに、
口づけて行く、
小蝶の心よ、
美しき姿に、
醉つた花の心よ、
おゝきけ黄金の羽根に、
花びらのふるゝ、

微妙なひゞきを。

夏のまひる

なやましきまでに、
白く大道は、
夏の陽に照りかゞやく、
萬物は悉く、
倦怠と疲勞に喘いで居る、
みどりの影を縫ふ、
パラソルの艶かしさは、
地上を飾る花のやうに、

赤爛せる街上に、
其の翼をひろげて、
不斷の愛撫と慰めとを、
つかれ果てた、
地上にたゞよはせてゐる。

聽けその響

水と空なる、
果てしなきかなた、
紺碧の中に、
かけ行く曙の光りに、
萬象は双手をあげて、
歡喜に躍る此の曉。
愛の抱擁に、

夢みるごとき男女の、
忍びやかに口ずさむ、
わき立てる戀の、
うたをきけ、
さながら、
きはみなきいつくしみに、
祝福されし其の響を、

吹く風も

バラ色にかゞやく空に、
雲雀はなく、
さながら、
戀の惱みを嘲笑するかのやうに、
青葉はさゝやく、
戀に泣け戀に泣けと、
私の肉體、
私の感覺、

すべて盲目的に、
まぼろしの影を追つて、
歡喜と焦燥と幸福とに、
血しほはをどる、
若やかな私のむねに、
銀のポプラを吹く風は、
肉感的な感觸を、
與へて行く。

孤獨

朝の光りは、
ゆるやかに流れ、
萬象は歡喜にうたふ。

されど私の環境は、
沈默を守つて、
少しの動搖さへ起らない、
なんたる靜寂さであらう。

私の吐息が光りの中にとけこむ、
其の響さへ私の鼓膜を、
おびやかして行く、
お丶一日の活動にいそぐ、
男女を見送る大道よ、
電車のきしりよ、
皆生ある幸によみがへる中に、
私は孤獨だ、
さうして淋しい、
私に訪づれてくるものは、

私の淋しい魂ををのゝかす、
つめたい風ばかりだ。

朝の光りに動く、
みどりの影よ、
お前は強くなれと囁くけれど、
私の閉された空虚な胸に、
なんの感じも與へはしない。

おゝ此の私を！　私を、

愛の抱擁によつて、
不安と寂寥とに、
むしばまれて行く、
私の肉體を光輝ある、
青春の世界へ、
導いて行く者はないのであらうか。

おゝ私は絶對に、
孤獨の淋しさを、
守つて行かねばならないのであらうか、

無心の花にさへ、
小さい虫は訪つれて來る、
朝の輝かしい光りの中に。

散る花

光りは凋み行く、
夕ぐれに、
風が亂打する、
哀調に誘はれて、
おゝ花は、花は、
散りて行く、
ほのかに薫る、
美しき微笑に、

いまはを飾りて、
かすかに、
忍びなく夜の草の上に、
私の目、
私の魂、
永久に歸らぬ、
花の上にをの〻く。

指環

お〻私の指環、
白くかゞやくダイヤの指環、
あなたと私の不變の愛を、
飾つて輝く私のダイヤ。

今日は朝から、
冷たく光る、
私のゆかしいあの人は、

きつと病氣でねてませう、
今日はこんなに、
私の指に
ダイヤ冷たく光るから。

紅薔薇

今日か〳〵とまつてゐた、
ばらはとうどう咲いた。
私はほんとに嬉しい、
丁度久しく逢はない、
戀人が私の前に、
其の美しい瞳を、
かがやかすやうで、
おゝ眞紅の薔薇よ、

其の芳香よ。

自然に燃ゆる、
其の美しいお前の魅力に、
私は陶然と醉はずにはいられない、
さながら、
平和の樂園に、
さまよふごとくに、
私の心をとろかす、
豐艶なる紅薔薇よ。

自然の風光

春は去り夏は來た、
綠の岡は、
天鵞絨のやうに輝き、
村落の森は、
强烈な日光に喘いで居る。

私の汗ばんだ膚に、
快感を思はせる

小川の靜けき流れよ。

さながら、
美しき油畫のごとく、
私の環境は、
ひつそりとして、
音もない。

睡蓮

まだき空、
嬌姿を殘す月の、
淡き輝き、
水にまかせし汝がやさはだ、
ときいろに輝く、
その薄衣、
南國の女王の裳にもにて、
清くかゞやかし。

しばしたゝずむ汝がほとり、
ふれなば落ちん、
葉上の白露、
おゝ美し、
朝に目覺めし睡蓮の花。

夕顔

晴れ渡る、
天鵞絨の夜空に、
仙女の瞳か一つ星、
下界にしたしむ其のまたゝき、
梢を流るゝ月の輝き、
草も木も默して語らず、
靜寂なる此のゆふべ、
沈默をやぶりて、

開きし夕がほ、
やさしううなだれて、
涼風にふるへし、
白き其のやさはだ。

光

日輪の光り、
今し地上に輝く、
眠りし萬象、
眼を開きて、
潑溂たる大氣、
天地にみなぎる、
飛躍せよ、
讃美せよ、

此の活氣ある現實の世界を。

五月雨降る日

近頃此の世に、
生をもたらした雨蛙が、
其の背を心地よく、
五月雨にうたせて、
高く〳〵一聲ないた。

陰鬱な空にむかつて、
汀の菖蒲はそぼふる雨に、

いよ〳〵其のいろをはえさせて居る。

更衣

そよ〳〵と、
初夏の風は、
衣がへした私の袂に、
心地よく吹いて行く、
木々の若葉は、
思ひきり晴れやかな、
五月の日光に、
照り輝いて、

若葉の香は文机のもとに、
たゞよひきて、
青き眞晝の空氣を、
ゆり動してゐる。

紅絹のさゝやき

糸のやうな、
五月雨が軒をうつ、
一人留守居の私のまはり、
なんといふ靜かさであらう。

膝にすれ合ふ、
紅絹の小さいさゝやきが、
私のむねにかろやかに、

かよつた時、
少女椿が、
ほろりと散つた、
青い芝生の上に。

流れ星

薄むらさきのもやは、
靜かな夏の町を包む、
美しく艶に、
薄衣をとほして、
女性の曲線の美を、
忍はせる此夕ぐれ、
すみ渡る大空に、
星一つ、

何事の暗示か、
彼方へ遠く、
流れていつた。

罌粟

初夏の、
青い空に、
血潮の滴りのやうに、
咲いた罌粟の花、
妖艶に魅力的に、
一つの謎のやうに、
私の心をそゝる。

林檎

卓上の林檎は、
青磁の器に、
よりそつて、
赤くをのゝく、
よろこびに滿ちて、
晩餐の集ひに、
談笑の中に。

人生の曙

新鮮な朝の光、
木の影にさし初む時、
流るゝ如き、
鐘の余韻は、
目覺めかゝつた萬象の上に、
長く〳〵響き渡つた。

私は淡いもやの中に、

歡喜と陶醉に、
自已を忘れてたゝずむ時、
沈丁花の微薫、
たゞよひ來て、
人生の曙にあこがれた、
私のひとみに清く輝いた。

眠れる子

暖かき南の椽の、
ゆりかごに、
うなゐごがねむつて居る、
春の風寒く吹くなよ、
安らけく、
眠りて居るうなゐごに。

木洩れ日

木洩れ日の、
影はをどる、
あこ等が遊ぶ、
青き芝生の上に、
其の黑かみの上に。

湯上り

湯上りの私の姿、
靄にかすんだ私のすがた。

鏡の中の櫻草、
ほゝゑむやうに、
ぼんやりと、
私のすがたを眺めてる。

何だか私は恥かしい。

櫻ちる夕

櫻散る夕ぐれ、
紺碧の空に、
月の微笑は淡く、
櫻の木影に、
たちよる君と我、
しゞまをやぶりてかなたに、
ふき起す草笛、
或は高く、

或は低く、
靜かなるかげに、
濁りなき空氣を通して、
波動を傳へて行く。

友の歸つた時

「さやうなら」
「さやうなら」と、
星清き町の中に、
友は歸つて行く。

アルバムや、
紅茶の茶椀、
私の室に散らされて、

友の去つたあとの、
淋しさがしみ〴〵と、
おそつてくる。

時は過ぎて行く、
私は深い〳〵、
冥想に耽りながら、
友の寫眞をみ入つた時、
若き日の思ひに、
ときめく心は、

私をほゝゑませずには、
おかなかつた。

春の入日

春の入日は赤く、
あこの横がほに、
手に持つ人形のうなじに、
和ごやかにかゞやく、
恍惚とみ入る遠き空のかなた、
折しもつきだすみ寺のかねに、
いやまさる、
幻想の中に、

暮れて行くよ、
春の一日。

花見ごろも

鐘がなる、
鐘がなる、
春の晨の鐘が鳴る、
やがて起き出て身に纏ふ、
花見衣を寢たまゝで、
衣桁の上に眺むれば、
風もないのに、
ゆらめいて、

ふりからこぼれた緋縮緬、
あはく電燈に輝いて、
なまめいた氣分が室にみつ、
鐘が鳴る、
鐘がなる、
春の晨の鐘が鳴る。

白い牛

赤い夕陽は、
今や地平線の上に、
落ちようとしてゐる、
一日の勞苦に、
疲れし身を横たへ、
白い牛は靜かに、
若草をはんでゐる、
若人のふかす、

煙草のけむりは、
薄むらさきにゆらめいて、
かなたへかなたへと、
流れて行つた。

風荒む夜

風はすさむ、
さながら怒濤のごと、
カーテンのすきより見ゆる、
すごげなる星の光よ、
ストーブも氣味わるく、
うなりもえたつ。
唯ソファに眠る、
あこの顏のみ、

平和に輝やく。

紅椿

空に眞紅の陽の輝き、
豊に流るゝ永遠の水音、
自然のリズムに、
しばし、恍惚と、
夢みる如きよろこび、
うるむよ瞳、
血潮わなゝく胸を、
双手に抱きて足もとみつめ、

眞白きうなじに、
たれかゝる黒かみ、
ひそかに搖れをのゝく、
我が心を知るか知らずか、
ホロりと散りし紅椿。

小筥

黑塗りの小筥に、
銀の喋番。
おゝ、此のわがピロードの、
小筥の中の戀人よ。

小さく輝く戀人が、
私の指に笑ふ時、
ダイヤの白い其の光り

ルビーはもえて赤々と、
私の身體に輝くよ。

うたげの席や、
晴の場所、
此の戀人とともに行かん。

私のゆかしい戀人よ、
私の小さいプライドは、
お前によつてみたされる。

ほんとにゆかしい戀人よ。

清きねむり

微風のすべつこい口づけに、
よみがへつた萬象は、
春光の和かい接觸に狂喜し、
若葉は清々しい香を、
たゞよはせてゐる午後、
私の愛する子は、
心地よい眠りを續けて居る、
搖籃の中に、

清い瞳は長いまつげに覆はれ、
赤い木の實のやうな頰は、
伸びて行く生の、
無心さと美しさとで輝やいてゐる、
なんと至純な眠りであらう。

おゝ愛する兒よ、
私は羨ましい、
呪咀も悲哀もさうしてなやみも、
知らない其の無心の眠りが、

されど自然はいつまでも、
お前を其のまゝの姿ではおかないであらう。

生の欲求はお前を、
地上の誘惑から逃がさないであらう。
私の乳房を探つた柔い手も
清雅な瞳も、すべて私達の
抱擁からのがれようとする時が、
吃度くるであらう。
さうしてお前達にのみ許された、

今の清い世界から見捨てられて、
而も私達の踏んで來た、
汚ない人生の行路を不安な目で、
みつめながら歩まねばならないのだ、
自然は一日一日と近づいて來る、
お前の歩みをとめようとはしないから、
私は全力をあげても、
お前を此世の濁流の中に、
投げこみ度くはないのだ、
永久に天使のやうな、

眞純さのお前を私はなかめて居たい。
おゝされど、
人力を超越した宿命的な、
自然の偉大な力を、
さへぎる事の出事ない、
此の自分が悲しく呪はしい、
私は泪ぐましい心で、
圓滿なねむりの上にあく事なく、
祝福を降らすやうに、

神聖な陽光が更に輝きつゞける中に、
果敢ない空想にわけもなく、
淋しい心のとらはれとなつて居た。

勞働者よ

お丶黄金の光り、
絶大な偉力をもつて、
富める者の上にかゞやく、
いまはしき光りよ、
汝が其かげを投げかける時、
富者は只讃美の限りをつくして、
汝を迎へさうして、
汝の凝視から、決して

放れやうとはしないであらう。

汝の光りが輝く中に、
暴逆な行爲が恥づる事なく、
飛躍して、來る日も〳〵、
汗と勞苦との尊い犧牲で、
社界の濁流と戰つて居る勞働者の上に、
殘忍な洗禮を施してかへりみようともしない、
おゝ美食暖衣に耽溺する富者は、
果して神の寵兒であらうか、

晩餐の上に慰安は惠まれてゐるであらうか、
いな、貧しき友よ、
彼の青白き光りに、
をのゝく瞳をみよ、
神經のはげしき焦燥と、
なやましき疲勞にしへたげらるゝ、
魂のみだれたる哀調をきけ。

無窮の蒼天の下に、
苦役する勞働者よ、

汝が一日の休息を、
其のまづしき食卓に求むる時、
汝の心は常に、
平和の歡喜と悅樂の翼とに包まれて
呪もなく、漸愧もなく、
逞しい筋肉の一すぢにも、
眞純な魂のひらめきにも、
虛飾なき團欒の樂しさは、
滿ちこぼるゝであらう、
自己のために自由のために、

行く手をさへぎる、
黃金の光りを恐れはてならない、
自然は汝の上に、
其の擁護を忘れないであらう。

冬の夜電車停留場にて

陰惨な夜の手は、
刻一刻と大地の上に、
其の影を投げて來た、
冷酷な夜の風は、
容赦なく人達の上に、
殘忍な鞭を打ちふりながら、
何處ともなく走つて行く、
夜の恐怖と不安とさうして

疲勞とにしへたげられた私は、
淋しい暗黑な心の中に、
樂しい晩餐と愛兒の上とに、
光明を見出しながら、
T町の停留所に半時を過してゐた。

私の五體は寒氣の威壓に、
心の焦燥に喘きながらも、
どうする事も出來ないでゐるのだ、
凍りついたやうな線路を突き進んで來る電車よ、

お前は一日の慰安を、
暖かき家庭の上にあこがれて居る人達を、
満載して幾臺となく私の前を、
嘲笑するかのやうに、
お前の瞳を光らせてすぎて行くではないか。

お丶お前はたつた一人の私を、
いつほゝゑみの暖かい目で、
迎へてくれるのであらうか、
私の心の平和をいつ淋しさから、

呼びさましてくれるのか、
不安と泪ぐましい心とが、
いたづらに、
女性の不甲斐なさと、
たよりなさに私の魂を、
をの丶かせて行くばかりだ、
けれど私に慰撫の言葉を、
與へてくれるものは一人だつて、
そこにはありはしない、
只冷めたい土の上におかれた、

黒いかげが見守つてくれるばかりだ、
羨望と呪詛にたちつくす此の私を。
あゝ空には無數の星が輝やいて居る、
地上の人類にいたづらに、
忍耐を强ふるかのやうに。

籠の鸚鵡よ

おゝ籠の鸚鵡よ、
お前の一聲は私の惡夢を、
破るに充分であつた。

私の心の動搖のせはしさよ、
魂のをのゝきよ、
おゝ此夢を！此ゆめを、
知つて居てくれるものは、

あの清淨な月と、
みどりのかべに輝く名畫の少女と、
私を目覺ましたかごの鸚鵡、
それが私をなぐさめるやうに、
みつめてくれるけれど、
私の靈はまだ夢現の境に、
さまよつて不安の情にうなだれてゐる。

さつきのまゝでおかれた、
あなたの手紙、

情熱で燃えるやうな手紙の文字、
皆私を愛の心で抱擁してくれるけれど、
おびえた私の心は、
やるせない泪となつて、
私を悲痛の底に落して行く、
おゝ私達のために、
あなたをまちませう、
どんなに今宵は寒くとも。

私の鸚鵡よ、可愛鸚鵡よ、

美しい其瞳で私達の上に、
平和の光りを、愛のかゝやきを、
み守つておくれ、
いつまでも、いつまでも。

黎明

市街はまだ、
静けき眠りをつゞけて、
草も木もひとしく沈默する時、
輝く無數の星は、
淡い光りで夜の名殘りを、
愛惜するやうに、
今目ざめかけてゐる下界に、
其まなこをたれて居る、

私は豫期しない寒さの冷酷さに、
驚異の目をみはつてむかつてゐる、
無遠慮にも、口づけて居る寒風の、
執拗さに私の五體は、
わけもなくふるへてゐる。

靜寂な夜は日の光りに、
感激しながら、
ゆるやかに流れ去り、
霜はすべての上に、

清らかさの限りで輝いてゐる、
朝日の暖かき接觸に、
笑みこぼれながら、
木の葉に連なる白銀の寶玉は、
滴となつて流れ星のやうに、
おちて行く一しづく　二しづく、
おともなく、
地上の萬物に活動を促す、
聖堂の鐘にゆれながら。

かもめごり

果てしなき海原さして、
とんで行く白いつばさの、
かもめどり、
淋しく啼いた一聲は、
夫を求むるなげきか、
子をばたづぬる叫びか、
潮風荒き此はまに、
波風しげくおそひ來て、

泪に凍るつばさをば、
ぬらしてとぶか、
又もとんで來い此はまに、
お前をばまつて居るわたしよ。

小猿

鐘がなる此夕ぐれ時、
私は或る町を歩いて居た、
汚ない衣を纏つた若者が、
うたふ唄につれて、
一疋の小猿が、
さかしくも躍つてゐた、
此可憐な動物の上に、
群衆はあはれみの目をそゝいで行く。

若者の唄が一きは高く、
餘韻を響かせた時、
涼風と夜の流れが、
小猿の身體をとりまいて來た、
おゝ此時、
こらへ兼ねた雲の層は、
持ち切れぬ雨の糸を、
しめやかに下界にむかつて、
落しだして、

小猿の姿を、
肅々の中に封じ込めて行く、
おゝ小猿よ、
今日は此雨によつて、
汝が渇望する、
休息を與へられるのであらう、
幸あれ小さき者よ。

樂しきまどゐ

なやましくも、
美しき平和の中に、
赤熱のほのほの如き灯はゆらぐ、
机上に盛られし赤き林檎は、
喜びと希望とに滿ちし人々の上に輝く、
おゝ美しき春の光りの中に、
醉ひどれし人達の、
美しき瞳の輝きよ、

粧ひのあでやかさよ、
忍びやかにふれ合ふ情熱の匂ひよ、
その身じろきの音よ、
すべて樂しさの中に、
心ゆくまで喜びに滿ちし私の手に、
あげられしうま酒の香、
おゝ喜ばしさが、
夢心地に私の若い心にふれて、
すべつて行く、
青春にもゆる人達よ、

長く長くをどれ、うたへ、
平和の中に、
幸福の中に、
愛の抱擁の中に。

過去の思ひ出

太陽は重い雲の層から、
不透明な輝きをなげたまゝで、
今日も暮れようとして居る。
やがて雨は物うげに窓をうち、
さうして私の心に陰鬱な、
暗い影を宿しながら降り續き、
梢はみどりにゆれて、
青玉のならんだつゆがみだれる、

私は書齋の机に、
數々の思ひ出を織る、
古い日記のペンの跡を追つて居た。

幾年か忘れられ、
其のまゝおかれた勿忘草の、
色のさめ果てた可憐な姿を、
ページの上に見いだした時、
私の心はさはつてはならないやうな、
感動にをのゝいた、

お丶花よお前はこ丶にあつたか、
汝の名から汝はそむかれたまゝで、
私が處女から人妻と、
かはつた今日の此の日まで。

暖かい春の野邊に、
小川の甘い囁きにきゝほれながら、
彼の君とあかずさまよつた其時、
數ある花の中で私の目に、
とまつたのはお前であつた、

彼の君は赤い脣に汝を口づけ、
あたゝかき胸に汝をつゝんで、
今日のかたみと、
私に與へられたのはお前であつた、
うれしさに心をどらせながら、
家に歸つた時、
今日の樂しさを綴つたページの上に、
お前をおいて祕めた心の感激に、
一人微笑したのであつた。

あゝされど、
語りし君と我とは、
社界の柵に沮まれて、
一個の知人として、
過去を忘れなければならないやうに、
周圍が私達の運命をきづいてしまつた。
彼の君も平安な家庭に、
樂しい日を送迎されて居るであらう、
私も何んの惱みもない此幸福さに、
歡喜して居る。

さはいへ、
嬉しかりし野邊の語らひ、
なつかしい君の輝いた瞳に、
私の心が思ひ出の中に、
春光にふれた嬉しさのやうに、
をのゝいてゐる、
忘れる事の出來ない過去の追懷、
追憶が思慕の情を生んで、
感慨が若い心を、

いたづらになやまして行く。

おゝ勿忘草よ、
汝もありし野邊が慕しくはないか、
私は淋しい、
人生の色彩から遠ざかつて行く、
今の私が、
花よ、つきる事のない
過去の囁きをともに忍ばうではないか、
汝の青春は過ぎてしまつたけれど、

思ひ出多き汝の姿を、
私は返らぬ樂しい夢の中に、
愛護して行かう、　私の生の
つきる其の時まで。

雨は降る亂調子の歩みを早めて、
追想にあく事知らぬ、
私の心を覗くかのやうに。

喜びのかげに

私の心よをどれ、
樂しい心の扉をひらいて、
淋しき獨居の朝の室に、
詫びしさと物足らぬ靜かさに、
しのび泣く心のどよめきから、
掬みつくせない思慕の情熱は、
優しい腕に私をつゝむ、
樂しさは微笑の中に、

私の心を飾つて行く、
美しい太陽の輝きの中に。

私の心よ、うたへ、
喜びの心の戸をあけて、
空間を廻る太陽の、
和やかな光りのかゞやきの中に、
地上に春の豐かな情景は滿ち溢れ、
花は虫の羽風にほゝゑみを交し、
虫は甘き芳香に其はねをゆるがせて居る、

小さき魂のほこりをいだく美しき花園、
充實した自然の惠と、
愛の光りの中にとけこむ、
なまぬるき微風の接觸に、
一人たゝずむ眞晝の靜けさが、
夢のやうに春の情緒を、
私のむねに通はせて行く。

私の心よ平和なれ、
靜けき心の扉のかげに、

空にやさしき星のひらめき、
おぼろに霞む月の淡きあたり、
春の夜風の妙なる調べに、
おゝねむりの宿のうれしきやすらひよ、
枕に忍びよる甘き夢の香に、
とけこむ美しき花の精靈、
まどかなる自然の乳房にすがる、
私の心をかざる紅のふしど。

目覺めよ私の魂

春の光は元氣よく、
いたるところに、
はちきれさうな、
活氣と豊潤さの限りをつくして、
躍りつゝける、
自然の調節に歡喜する萬象の上に。
微風はなめらかに、

私の心をなでながら、
花から花へととびまはり流れて行く。
おゝ此若々しい訪づれに、
私の魂よ、
さうして私の目の前にあるすべての者よ、
目覺めよ、
冬の暗黑より光の國へ、
地中にうごめく少さい生の末まで、
太陽の光りの暖かさに、
喜びの聲を響かせて居る。

青春の若人よ、
躍りだせ、
飾らぬ眞純なすがたで、
情熱みなぎる、
天地融合の眞正中に。

或る女に

春の雨が夕ぐれの軒をうつ、
淋しい窓にお前は何を瞑想してゐるか。
青春の情熱は、お前の身體を廻る赤い血潮を
薄衣の柔かさで包みながら、
お前を誘惑の暗い道に引きづつて、
行かうとしてゐる事を知らないのか。
今お前は人生の十字街に、

美しい姿をさらして、
とるべき道を迷つて居るのではないか。
私達が理智とあはれみの目で、
お前を迷夢から、
呼びさまさうとして居る事を、
其美しい心で見敗る事は、
出來ないでゐるのか。

富がなんだ、
美貌がなんだ、

お前が終生の伴侶は、
只其人の尊い純な愛と、
魂に宿る心の賢明な、
輝きでなくてはならない、
靜かに冷靜な心の窓を、
開いて見よ、
お前が踏んで來た道、
行かうとする人の胸、
たゞ猥りな情慾に盲目となるなよ。

もつと自己の尊嚴のもとに、
自己を守らなくてはならない、
理智の目で社界の濁流から、
尊い輝きを求めようと、
つとめなくてはならない、
お前が何者をも、
犧牲にして突き進んだ時、
美しい、さうして甘い、
悅樂の花はそこに咲き亂れて、
お前の期待を裏切る事なく、

お前を歎迎するのであらう、
されど知らなくてはならない、
盛りの花は永久に其の美しさや、
芳香を持續する事の出來ない事を、
かならず黑いつめたい土の上に、
ふみにじられた醜骸を
晒らさねはならない日のある事を。
私のかうした眞心の閃きも、
今の汝は一個の塵と、

見捨てるであらう、
後日、情熱と不安との爭鬪は汝の心を虐げ、
汝は暗い悲しみの悔恨を抱き、
誘惑から放れようともがく、
其の淋しさを私は知つてゐる。
おゝ汝、めざめよ、
汝よめざめよ汝の不合理な其迷夢から、
私達は人世と戰ふ爲めに生きて居るのだ。
どんなに悲しみと憎しみとが、
お前の心を滿たさうとも、

お前は正義に微笑して忍ばねばならない。
お前のまだ甚しく汚されぬなやめる心で、
神に默禱を續けて、
短かい「生」の「終」りを飾る
愛撫と安堵とさうして幸福とを、
汝が兩親の慈愛の許に、
求め「なくてはならない」筈だ、
かくて汝の心は眞の平和に充滿し、
天は永久に祝福し、

地は限りなき愛を、
汝の上にそゝぐであらう。

めざめた悩み

夕陽は地平線の、
彼方に落ちて、
空は刻一刻と夢よりも果敢なく、
天地、薄墨色にぼかされ、
月の光り、雲の奥から輝き、
此世の美しい静寂さが、
私の胸に深く喰ひ込んで行く時、
見よ夕べの窓べを通る人達を。

皆うれしさうに、
さうして皆笑つて居る、
なんの惱みもない、
あの若々しい顔を、
街燈の灯に輝かして、
まるで春の裸女神の亂舞の姿で、
其の樂しい歩みを、
甘い歡樂境に進めて行くかを。

皆あの人達は、
新時代に目覺めた人の群であらう、
其の中に私は！私は淋しい、
希望と愛に陶醉したあの人達の、
通つて行く路へ、
只一人ぼつちで愛もなく戀もなく、
廣い冬枯れのやうな寂寥さで、
臨終の喘ぎに疲れたやうな、
魂に引きづられながら、
自由と解放とを此少さい胸に、

懸命な力で呼びながら、
狹まい因襲の城壁から、
羨望と呪咀との眼を投げて、
一人淋しさにふるへてゐるのだ。
おゝ私の五體は舊い道德の壓制を、
受けるにはあまりに疲れ、
あまりにかなしすぎる、
粉黛と美衣に甘んじてゐた時代は、
もう私から遠く過き去つてしまつた、
虛飾の美は永久に私を守るであらうか、

私の盲從は自己の覺醒に、
私を樂しませるであらうか、
あゝ清純な男女の、
交際を嘲りし人よ、
合意の離婚を侮辱した輩よ、
私の行爲私の思想の上に、
汝は必ず怒りと嘲笑との限りをもつて、
迎へるであらう。
されど私達の世界は、

そんな窮窟なものではない筈だ、
私は一般の上に、
少しの危惧もなく、
人生の行路を濶歩して行く事を、
渇望して止まないのだ、
夕べの窓の人達のやうに。
おゝ汝等よ、
理解ある人類の柱となつて、
もつと社交的な考慮と眞劍さを、
自由に目覺めた民衆の上に、

表現しなければならない時が、
汝等の魂をおびやかしてゐるではないか。
私達の生命を高め、
私達の生命の上に深い喜びを、
與へらるゝ日を待ち望まう、
かくて不合理な壓制と屈辱とに、
虐げられし人も、
罪に自已を葬りし人も、
束縛を許された、

自由の影に其のいまはしい、
姿をかくして行くであらう、
すべての世界から。

別離のかなしみ

お丶T子様、
私は貴女と別れなければ、
ならない悲しい日が、
とう〳〵私の前に押しよせて來ました。
私達はどうしても別れなくては、
ならないのでせうか、
どうして社會はかうも、

私達の上に辛らいのでせう、
私はいつもより、
太陽の足が一時間も二時間も、
早いやうに思はれてなりません、
西の空は赤くもえだして、
今日の終りを告げる鳥の聲が、
淋しい私の心をかきみだして行きます、
私は貴女を上野の驛に見送るために、
よぎなく支度をさせられて私をのせた、
自働車は大きな目を夕闇の中に、

光らせて勢よく進んで行きます。
T子様よ、
淋しくはないのですか、
此華かな都を跡に、
強く都會を執着する心を、
破壞されながら、
友人も知人もない、
森の都に旅立つ事が、
あなたの美しい姿を都から、

遠ざけてしまふ事が――
私の悲しい迷想を乘せた自働車が、
驛について群衆の中に、
貴女の淋しさうな顏を見出した時、
私の泪に曇つた心の淋しさが、
自分を忘れさせて、
貴女のやさしいむねの中に、
私の身體を投げかけさせました、
さうしてかたく〳〵にぎられた、
二人の手は感激にふるへるのを、

とめる事は出來ませんでした、
只別離のかなしさに調和を失なつた私は、
巨人の縱列のやうな偉大な、
汽車の窓にたゞずんでゐました。

「さやうなら御機嫌よう」、
「さやうなら御大事に」と、
かなしさの中にあたゝかい心をかよはせる、
瞬間に汽車は進行を初めてしまひました、
自己の職務をほこるやうに、

貴女の白い泪にぬれた顔を、
車窓にうかせながら、
黒煙を名殘りの空にたゞよはせて、
夕闇の中に次第次第に消えてしまつた、
冷たくプラットホームを吹く風に、
私の悲しみの夢はやぶれて、
現實にかへつた時、
強大な汽車も貴女の顔も、
すべて夢のやうに、
人影のまばらになつた私の前に、

長い線路が淡い光りに白く横たはつて、
貴女の行くへを忍べとばかりに、
輝くのでした。

然しT子さんよ、
私は私の全靈をあげて、
暖かい神の愛の中に、
あなたのゆくての安全を、
いのる事を忘れはしませんでした、
おゝ去りし友よ、